

家計簿運動からの報告



中村喜美子

1 ————— はじめに

神奈川県片倉町にある横浜生協本部の消費者委員会には、毎月、各家庭から200通あまりの家計簿の集計表が集まってくる。この数表は、担当の職員により平均値が出され、その結果は月報のかたちで各家庭に知らされるのだが、この1枚1枚の数表の裏には、異常なインフレ下で、家計をやりくりしている主婦たちの切実な実感が書き込まれている。

全体的にみると、主婦たちは、この状況に積極的な怒りを表わしているというよりは、なすすべが見当たらない中で、不安感を強め、些細なやりくりにわびしさを感じているようであった。次にいくつかの例をひいてみよう。

「主人が今年60歳になります。定年後の新しい職場で収入は少なくなり、物価は高くなり、貯金はできません。今までの私たちのわずかの貯金は物価高の中で一つも役に立ちません。厚生年金は働いている者には出ない由、長い間かけた厚生年金がいざ困っている時に、働いているから出ないとは何とも割り切れない気持です」〈59歳、4人家族〉。

「1月先、1年先のことを考えられるような落ち着いた暮らしはいつになったらできるのでしょうか。灯油も値上がりで、今年の冬は暖房なしの覚悟を決め、秋から子供に薄着の習慣をつけて自衛しています」〈35歳、3人家族〉。

「生活費の値上がりで衣料費や教養娯楽費がほとんどとれなくなりました。昨年のはじめごろに比べると不安な気持で生活しています」〈43歳、4人家族〉。

「待望のボーナスが出ても借金返済で全部なくなり、毎月の穴うめはどうしても主婦の働きにかかってくる。何を節約するか？ もう節約するところがないくらいです。食費がかさむし、冬期に向

かって灯油・ガス代も値上げ。食べるものも、暖房もままならぬ世の中。寒々としてくる」〈34歳，4人家族〉。

「何もかも値上がりで、この辺で物価を安定させて欲しいと思う。いつまで続くかこの様子。我々サラリーマン、しかも定年退職者は年を重ねていくのがこわい気持で生きている。子供にはたよれないし、細々と生活している現実。早く死んだ方が勝ちかもしれない」〈64歳，2人家族〉。

「人参1本80円，キャベツ1個400円の物価高にあいた口がふさがらず，我が家では毎晩おそい帰りの夫の夕食をむだにしないように作らなくなりました。かわいそうに，夫は早めに帰ってきた時は，残飯整理役になっています。ところが，こんなおびしい節約で食費代がやや減りました。うれしいよりなさげなくなりました」〈35歳，6人家族〉。

「アメリカの穀物不足が飼料にひびいたせいか卵の値上がりが目どく，庶民の唯一の蛋白源も遠く現実。健康こそ宝と毎日財布の中味を気にしながら食物選び。そのうちフラストレーションで何かが起こりそうな自分をいましめる今日である」〈31歳，3人家族〉。

「10月からの公共料金の値上げを考えると頭が痛くなります。政府は物価問題を少しも考えず，率先して値上げに励んであきれられるばかりです。いろいろな消費者運動に参加しながら，ちっとも暮らしが楽にならず，無力感を感じるばかりです」〈36歳，3人家族〉。

また，49年9月には倒産企業の負債総額が過去最高に達したが，そうした不況を反映してか，「残業手当カット」「給料遅配」「給料停止5カ月目」などの深刻な事態も書きこまれている。

2 ————— 家計簿運動4年間のあゆみ

昭和48年暮，私たち消費者は晴天の霹靂ともいふべき事態に遭遇した。それまで「使い捨て」とか「消費は美德」という言葉が氾濫し，物がなくなる事態など夢にも思わなかった。ところが，いっせいに物が姿をかくし，お店のレジでたくさんナフタリンを買う人が現われたら，たちまちナフタリンが売り切れたなど，嘘のような話があちらこちらで起きた。

そのような中で，この事態はどうして起きたのか，誰がしくんだのか，実態はどうなのだろうかという疑問がおり，それについての学習と行動が生協の組合員によって開始された。

先ず，同年12月6日，県の生活協同連合会を中心に，灯油，チリ紙，砂糖などの獲得大会が開かれ，1,000人を超す組合員が灯油缶をたたいてデモをし，灯油元売りメーカー11社を相手に一歩も引かぬ大衆交渉をもち，量を確保し価格を下げるといふ大きな成果を勝ちとった。

その後も農林省，通産省，食糧庁，県庁，市にたいし要請・交渉をくり返す中で，小麦粉，洗剤，砂糖などの放出をさせて組合員の暮らしを守った。

この大衆のエネルギーはどうして育てられたのだろうか。能動的，自覚的，主体的な消費者は一挙に出来上がるものではなく，共同購入活動，学習活動によって絶え間なく積み上げられるものだと思う。とくに，毎日，毎日書き続ける家計簿運動の果たす役割がいかに大きいかを痛感したこの4年間であった。

1 消費者委員会の成立

先ず昭和46年4月，横浜生協理事会の決定にもとずいて，消費者委員会が設置された。その規約第1条には

「横浜生協の日常業務をより組合員の生活実態に近づけ，有害品の排除，管理価格をやめさせ，公害を監視し，消費者のための商品〈CO—OP商

品>を開発するための専門委員会とします」とうたわれている。

これらのことを遂行するためには、どうしても私たちの生活実態を示す基礎データ、すなわち家計簿が必要であった。

現在、横浜生協は市内に23の店舗をもっている。その店舗ごとに、30人～50人の地区消費者委員会<組合員の中の希望者>をつくり、その中から本部委員を2人互選し、この人達が本部消費者委員会を構成している。46年4月では、全委員は240名<本部委員25名>であったが、現在では、全委員814名<本部委員47名>となった。地区も本部もそれぞれ月1回の定例会を持ち、必要に応じて自主的に随時集まるようになっている。

消費者委員会の任務は

<1>家計簿の集約

<2>CO—OP商品の点検

<3>有害品の摘発と新規商品のテスト

<4>その他

となっている。今回は、そのうち第1の家計簿集約の報告をしたい。

2>家計簿作り

家庭の主婦にとって一番重要な仕事に、<やりくり>というのがある。その手段として家計簿記帳は最も合理的かつ正確な方法である。毎年年末になると、1,200万冊の家計簿がさまざまな形で各家庭に配布されるという。この数は国民総世帯の約半分に達するもので、家計簿が家政の中でいかに重要なものとして認識されているかがわかる。しかし、これをきちんと年間を通して記帳し集計し、実際に役立っている人がどれだけいるだろうか。委員会の話合いの中でもほんのわずかな人に限られていた。だからこそ、多数のサンプルを集めることの困難性も容易に推測できた。しかも、家計簿の項目は、従来の大ざっぱなものでは数字として使えない。例えば主食は、米・パン・めん

に、副食も魚貝類・肉類・乳卵類・野菜・乾物海藻・加工食品・調味料に分類すると、今まで12項目ですんだのが一挙に38項目になる。しかも自分の家計簿から、それぞれが提出用の項目を引き出さなくてはならないので、記帳する側の手数は大変であった。

最初の46年4月の提出数は240名中92通、5月が87通、7月70通と下がった。この間、家計簿運動の重要性を委員会のたびに訴えながら、提出できない理由を話合った。その結果、集まらない理由は<1>使用している家計簿が各自ばらばらで生協で求める項目を拾い出すのが大変

<2>二重につけなくてはならないので時間がかかる

<3>人のために書くものは、年1回～2回ならいいが、毎月は続かない

<4>集計報告書を見ると、平均の収入が自分の収入よりかなり多いので気が重くなる

<5>プライバシーがもれるのではないか

の5つに集約された。

そこで本部消費者委員会では47年に向けてどうしたら良いかが討議され、その結果、統一家計簿編纂が決定された。本部委員の中から家計簿委員が6名選出され、46年9月からその作業にかかった。何回もの編纂委員会の中で

○ 誰でもつけやすいもの

○ 我が家の記録として十分満足出来るもの

○ 集団集計のしやすいもの

などが基本となった。

みんな10年以上記帳し続けている家計簿のベテランばかりではあるが、学問的、専門的な知識を持った人は1人もいないのである。それぞれの経験をたよりに、横に書いていく方がいいとか、縦の方が計算しやすいとか、ケイの引き方や間隔・色に至るまで、主婦らしい細かい意見が次々に出て、幾度書いては消したとか。また最近とみに

多くなった、公共料金等の銀行自動振替の家計簿上の処理、それ以上に大変なのが、費目分け。項目が細分化されればされるほど、記帳する立場になればこれが迷いのもととなる。例えば小麦粉を買ったとする。さてこれはどこの項目へ書くのかなと思った時、パンをつくるために買った人は主食の中のパンに入れたい、うどんをつくるために買った人はめんの所に、菓子をつくるつもりの方は嗜好品の菓子の項に書きたい、テンプラの衣にする人は調味料に、となると一体これはどうすればよいか。今までの家計簿を見ても、分類は色々でいっこうにわからない。勿論定義もない。中には赤ちゃんのミルクは赤ちゃんにとっては主食だから、主食に入れるべきだ、などという意見も出る始末。そこで話は原点に立ち返える。「集計」という共通の目的があるのだから、各自勝手な項目に書き込んでいたのでは統計として役に立たない。結局、この家計簿独自の約束ごととしての費目分けを決めましょうというところまでたどりついた。まことにたどたどしくも、真剣な幾度かの編纂委員会ではあった。

印刷、校正を何度かくり返して、表紙の色、デザイン、毎日手にするものだから丈夫な紙で汚れが目立たない表紙、しかもあきがこないもの、等々まったく今までの人生経験の中に一つも出てこないことばかり、当時はみんな道を歩く時も、食事中もそのことでいっぱいであった。

やっと出来上がったのが46年11月下旬、インクのおいも新しい1冊を手にした時の感激は生涯忘れないだろう。

それからが大変であった。朝日、読売を始め、NHK、NETテレビなどで「戦う家計簿」として取り上げられ、しろうとがつくった家計簿で大衆を巻き込んで運動をおこし、政府と対決していくといわれ、かえって我々の方が啞然とした。果して私達にそんな力があるのだろうかと思った。し

かし生協運動を強力なものにするのがこの目的であるのだから、結果的にはそうなり得るのだとみんなで話合った。また一方で、全国の生協の仲間や消費者団体、あるいは個人からの問合せ、頒布依頼の中で、この報道は委員や組合員をどんなに力づけたことか。「私達は困難ではあるが、正しく価値ある運動をしている」の確信を強めた。委員の数も47年1月には400名をこえ、全員提出を目標に配布された。47年9月13日神奈川県生協大会では、私たちの家計簿運動の報告と共に、この運動を全県下に拡大することを提案し採択された。

48年は前年の3倍の3,000部、48年には1万部、そして50年、私たちが物価抑制の悲願をこめてつくった家計簿は、大きく全国的な拡がりを見せて2万部を発行し、4年前にくらべて、20倍に拡大した。しかも4年前に1部300円で売られたものが今年も300円で売られるのである。値上がりしないものの何一つない現在、ここにこのような「協同の精華」を見ることはほんとうにうれしい。

3 ———— 襲いかかるインフレ下の家計簿

「私のところではこのごろ収入が減って大変なのよ」「あらどうして?」「主人の会社が操業短縮で残業できなくなったのよ。その分、私がパートに出て稼ぐことになったの」という会話が交わされたのは去る49年9月の委員会だった。果して今、9月の家計簿集計をみて、この事実がはっきり出てきたことに驚いた。さらに、世帯主収入に

表一 最近収入の推移 <単位：円>

	49年 7月	8月	9月
世帯主収入	159,481	169,642	163,622
主婦収入	13,264	9,304	8,811

ついで主な収入源でもある主婦収入もここ1月先に減り出している<表1>のは、いちばん先に弱いところへ影響がでていることを示しているのではあるか。とどまるところを知らぬ物価上昇の中で、正に由々しき事態といえる。

家計簿は、毎月回収されて各項目ごとの平均値が出され、「家計簿集計報告書」に記載される。ついで、「消費者委員会だより」が発行され、これには、単品100名単価調べと家計簿集計の前年同月比およびそれについての家計簿委員の解説がのせられる。

「消費者委員会だより」より47年から49年の3年間の各年9月をとって対前年同月比をみると、その上昇率の異常な変動に驚く<表2>。

伸び悩む収入

先ず収入欄をみると、全体収入では、48年は前年の30%増であるが、49年は前年の10%増にとどまっている。これは、世帯主収入および主婦収入の伸びがにぶったことが影響しているためで、前述したように不況中の物価高で収入が安易に得られないという状況ができてきているのである。正に二重の苦しみが私たちを襲おうとしている。そのかわり貯金の引出しが48年の対前年同月比45%増が49年には54%増と幅を拡げている。

増大する食費の上昇率

消費支出の合計をみると、48年の対前年同月比が30%増にたいし、49年は25%増にとどまっております。全体で、買い控えの傾向がみられるが、食費合計では、48年は19%増が49年には46%増と大幅に上昇しており、その中でもとくに肉類の上昇は著しく、48年17%増が49年にはなんと192%増で2倍にも、はね上っている。

住居費も、48年45%増にたいし、49年には58%増と高い上昇率である。昨年のパニックの代表的なもの、砂糖、醤油、食用油、調味料の項目や、チリ紙、洗剤などがふくまれる理容衛生の項目も、

49年の上昇率は高くなっている。

被服費と雑費に買い控えの傾向

買い控えの傾向は全体的にみられるが、その中でもとくに、被服費に著しくあらわれている。47年から48年では34%も上昇したのに、48年から49年には12%増にとどまっている。中でもシャツ下着にいたっては、49年の上昇率はマイナス23%である。昨年からの繊維の暴騰により、明らかに買い控えていることがうかがわれる。

その他、保健医療費が、48年84%増であったのが49年には16%減に、交際費が59%増から41%減に、交通費が70%増から8%減に、さらに教育費も28%増から15%減へと下降している。49年に入り、上昇率が増大したことへの驚きと怒りよりも、むしろ、これらの下降した部分に非常に胸の痛む思いがする。私たち庶民の切なる願いも空しく、ますます激しさを増すインフレの前に、もはやマイホーム建設の夢も、老後のプランもけし飛んでしまった。とにかく、インフレは人々の心を荒廃へと導き、明るい世の中は期待出来なくなることは確かだ。

4 ————— 家計簿運動の意義と目的

1 > 国会の大蔵委員会で活躍

昭和48年3月28日、「47年度消費者委員会活動のまとめ」の中の「家計簿集計による47年1年間の税金と社会保障費は、平均月収の2カ月分」という数字をもって、共産党小林政子代議士は衆議院大蔵委員会において、「大蔵省は国民の生活実態を知っているのか」と鋭く追及し、課税最低限を年収150万円まで引上げるべきだと迫った。

田中首相は5月31日、来年度1兆円減税を検討し、その中で、夫婦と子供2人の標準家庭のサラリーマンで、課税最低限を112万円から150万円に引上げることを指示した。これは49年4月から実

表一 2 昭和47. 48. 49年9月度対比

	47年9月	48年9月	49年9月
調査世帯	168世帯	112	197
世帯主平均年齢	41.9才	42.4	41.8
平均家族数	3.9人	3.4	4.0
男	2.0人	1.8	2.0
女	1.9人	1.6	2.0

住宅概況

	47年9月	48年9月	49年9月
自家	106件	74	120
官公社	15	7	8
社宅	20	11	22
公営アパート	14	14	34
借家	13	6	13

1. 収入

<金額単位：円，上昇率%>

	47年9月	上昇率	48年9月	上昇率	49年9月
収入合計	136,444	130.1	177,592	109.7	194,878
世帯主収入	108,967	129.0	140,658	116.3	163,622
賞与	220	1140.4	2,509	156.7	3,933
自家営業	6,746	74.8	5,049	100.8	5,092
主婦収入	4,769	169.1	8,065	109.2	8,811
家賃地代	2,599	150.8	3,920	52.2	2,049
資産売却					
贈与	308	61.3	189	679.8	1,285
同居人より	926	177.7	1,646	121.8	2,005
のその他の収入	11,491	132.9	15,272	42.8	6,540
借入金	418	67.7	283	544.5	1,541
貯金引出	12,732	144.7	18,426	153.5	28,297

2. 非消費支出

	47年9月	上昇率	48年9月	上昇率	49年9月
合計	49,626	134.6	66,824	92.2	61,602
1. 税金	(6,924)	146.3	(10,132)	111.5	(12,984)
所得税	3,402	137.4	4,676	53.5	2,505
地方税	3,224	150.1	4,842	161.3	7,811
固定資産税	110	397.2	437	37.9	166
その他	188	94.1	177	1413.0	2,502
2. 社会保障費	(10,097)	137.8	(13,914)	139.5	(19,413)
健康保険	2,125	133.8	2,844	140.0	3,984
失業保険	471	152.0	716	137.2	983
厚生年金	1,507	181.9	2,742	137.6	3,774
国民年金	167	156.8	262	185.8	487
共済掛金	1,152	119.5	1,377	119.2	1,642
火災保険	331	141.9	470	150.0	705
生命保険	4,005	130.6	5,234	141.3	7,399
その他	339	80.8	274	160.2	439
3. 実支出以外	(32,605)	131.2	(42,778)	68.3	(29,205)

貯金繰越を含む	30,249	130.3	39,424	60.0	23,659
の他	2,356	142.3	3,354	165.3	5,546

3. 消費支出

	47年9月	上昇率	48年9月	上昇率	49年9月
合計	99,350	130.0	129,194	125.0	161,573
○食費の消費支出割合	(33,521)	118.7	(39,807)	146.6	(58,387)
割合	33.7%		30.8%		36.2%
1. 主食	4,603	104.1	4,796	145.4	6,976
米	3,275	92.5	3,031	146.3	4,436
パン	848	122.2	1,037	135.3	1,404
めん	480	151.6	728	156.0	1,136
2. 副食調味料	(19,399)	122.3	(23,732)	155.3	(36,869)
魚貝類	3,492	103.5	3,617	150.7	5,451
肉類	5,217	116.8	6,097	191.9	11,702
乳卵類	2,792	131.5	3,672	137.2	5,040
野菜	3,791	121.1	4,592	151.3	6,948
乾物海藻	725	86.6	628	134.2	843
加工食品	1,859	169.8	3,158	132.4	4,184
調味料	1,523	129.2	1,968	137.2	2,701
3. 嗜好品	(7,755)	109.1	(8,461)	128.3	(10,861)
菓子	1,664	133.0	2,214	139.4	3,088
果物	2,878	103.9	2,991	118.3	3,541
酒類	1,588	102.7	1,631	143.2	2,337
飲料	1,625	100.0	1,625	116.6	1,895
4. 外食	(1,764)	159.7	(2,818)	130.6	(3,681)
○住居費の消費支出割合	(8,923)	145.3	(12,970)	158.2	(20,526)
割合	9.0%		10.0%		12.7%
家賃地代	4,028	160.8	6,481	171.9	11,142
設備修繕	1,088	290.3	3,159	81.9	2,588
家具什器	3,807	87.4	3,330	204.0	6,796
○光熱費の消費支出割合	(4,187)	94.2	(3,948)	129.0	(5,095)
割合	4.2%		3.1%		3.1%
○被服費の消費支出割合	(6,359)	144.5	(9,195)	112.7	(10,368)
割合	6.4%		7.1%		6.4%
上着	2,984	148.8	4,442	104.5	4,643
シャツ下着	767	151.2	1,160	76.7	890
他の衣料	1,267	117.2	1,485	138.4	2,056
身の廻り品	1,341	157.1	2,108	131.8	2,779
○その他の消費支出割合	(46,359)	136.4	(63,274)	106.2	(67,197)
割合	46.7%		49.0%		41.5%
保健医療	2,151	183.6	3,951	83.9	3,318
美容衛生	3,078	106.4	3,276	136.3	4,468
交際費	5,555	158.5	8,810	59.3	5,225
交通通信	3,079	170.3	5,246	92.3	4,844
教育	10,103	128.2	12,958	85.1	11,031
教養娯楽	7,364	100.0	7,366	157.1	11,573
職業費	11,568	151.0	17,478	121.3	21,218
自動車関係	997	197.4	1,969	165.9	3,267
その他	2,464	90.0	2,219	101.5	2,253

施され、集計報告の前年同月比の中でも、4月以来所得税だけは昨年に比べて下がっている。もちろん、相次ぐ失政にたいする国民のきびしい批判をかわすための、人気とり政策だったかも知れないが、私たちの数字がこのようなところで活躍したことは確かな事実である。

また、48年4月19日、衆議院物価特別委員会に、日本生協連の副組織部長が証人として出席した時にも「家計簿集計報告書」が提出されている。

2>消費者のための商品開発に利用

家計簿の数表が生協運営に活かされていることはいうまでもない。たとえば、精肉担当商務は、この表から1カ月の肉の購入量を計算し、1日平均の来客数から売り上げ率を出すことができるのである。

しかし、単に、商品の売り上げ率を出すだけでなく、消費者委員会のもう一つの重要な機能である消費者のための商品<CO-OP商品>の開発にも、大きな効用を発揮している。

水や空気や大地やあらゆるものの汚染が進んでいる中で、私たちが口にすることも、その例外ではなくなっている。ガン患者の急増、原因不明の難病、奇形児の誕生など聞く度に食品への不安はおおむねもない。そのような中で、とくに、一家の健康をあずかる主婦にとって、安全なCO-OP商品への期待は非常に大きい。横浜生協では、この4年間に、無添加ウィンナー、無添加カマボコ、竹輪など46種類を開発したが、その開発の基礎データとなるのが家計簿集計の数字である。

すでに述べたように、食費の値上りはきわだって激しく、私たちの食生活は栄養上満たされた状態にあるのかどうかという疑問がでた。そこで、家計簿集計から出る1日1人当りの食費を計算し、それを1日に必要な栄養をとるための標準食費と比べてみた。表3に示されているように、常に栄養上満たされた食生活が営まれていないという驚

表-3 1日1人当たりの食費の比較

	家計簿集計から出た1人1日当の食費	1日に必要な栄養をとるための標準食費
昭和47.4	248円	300円
48.3	334円	380円
49.9	465円	621円

注>1日に必要な栄養量は1人2,200カロリー
くべき結果がでていいる。その上、食品の中味は安心できないものが多いのである。

そこで私たちは、足りない食費の中でも、非常に多く消費されている嗜好品<たとえば49年9月では、食費全体は58,384円で、そのうち嗜好品は19%10,861円を占めている>に目を付けた。特に菓子類は、発育盛りの子供たちが毎日食べるものであり、市販品のほとんどに合成着色料、酸化防止剤、保存料、合成糊料、合成香料などが使われている。それだけに安心して食べられるCO-OPのお菓子を是非つくりたいという願いは強かった。その結果、現在では、アメ、カステラ、あられ類、生牛乳を原料としたアイスクリーム、シトロン、天然果汁100%のジュース類が、母親の愛情と願いをこめて、私たちの店舗に並べられている。

3>運動の真の目的

家計簿の数字は、公の場ではなばなく活躍してきたが、運動の重要な意義は、もっと別のところにあるように思われる。

従来、家計簿記帳は、全く個人のためのもので、台所から一歩も出ることはなかった。各自のライフサイクルに合わせて、たとえば、教育、マイホーム建設、老後などのための生活設計に使われていた。したがって、家計簿の期首にのる金額は、大方は夫の手取り金額であった。その中で上手にやりくり出来るのが、主婦優等生というわけである。

しかし私たちのつくった家計簿には、手取り金額

ではなく、支給額が記入されるようになってい
る。その中で、〈非消費支出〉の項目——日常生活
にあまり関係ない部分、すなわち、税金、保険
等の社会保障費、貯金、借金返済などの部分——
に、私たちは目を向けていった。

税金、厚生年金、健康保険、失業保険などは毎月
給料から強制的に引かれているが、これはどのよ
うに使われているのだろうか。万一病気になった
時、老後の年金は、と考えるとゆくとまことにお寒
い限りである。しかもこの金額は支給額の20%近
い。だからこそ、私たちは、節約を重ね、任意の
生命保険に入り、貯金に励むのである。狂乱物価
の荒れ狂う中で、これらの増加の速度もはげし
く、まるで庶民の不安感のバロメーターのよう
だ。

49年9月の集計報告をみると、1世帯当りの生命保
険料は7,399円にもなっている。48年度生命保険
会社〈全社〉が集めた金額は1年間に2兆8,522
億円にたいし、支払った保険金はたったの5,800
億円〈17%〉にすぎない〈「保険のカラクリ」日
本生協連発行〉。私たち庶民から尊いお金を集め
て、大企業や大手商社に貸し付け、大儲けをして
いるのがその実態である。しかも、保険金がかた
ちの手に戻ってくる時には、年7%の物価上昇
が続くとすると、100万円は30年後に13万円の価
値に減少している。正に、自分で承知していなが
ら詐欺にあっているようで、全く憤満やるかたな
い次第である。貯金も同じような事情であろう。
私たちの血と汗の結晶は大企業を太らせ、その結
果はね返ってくることといえば、自然破壊や公害
というマイナスの面ばかりではないだろうか。
私たちは、何かが間違っていると感じ、社会の仕
組みや経済、政治の問題にまで懸命に勉強をすす
めていった。この大企業優先の仕組みを国民生活
優先の社会にしていくためには、主婦はどうした
らよいのであろうか、を話し合った。家計簿一つ

一つの項目が、すべて社会と政治と世界経済へと
直結していることを、自らが家計簿運動に参加す
ることにより、はじめて身につけたのである。こ
れこそ、家計簿運動の真髄であろう。主婦が社会
に目を向け、社会全体の中の我が家であるという
認識をもつことこそが真の目的であるとさった。

5 ————— これからの課題

今、一体組合員は生活全体の中でどの部分に深い
悩みをもっているのだろうか。その悩みを解決す
るためにどのような活動の展開をすればよいのだ
らうか。一面に広がる数字は、一見冷たいけれど
も、これほど生き生きと庶民の暮らしの哀歓をう
たい上げているものはないと思う。

家計簿集計報告書には、年代別に平均値が出され
ているが、それは、現在ほとんど役に立っていない。
20代、50代、60代のサンプル数が余りに少な
いからだ。

また、家計簿の回収は必ずしも初期の目標通り
に集まってははいない。委員は、現在、80名を超え
ているが、集まるのは220~230通である。しかし
ながら、毎月発行される報告書とその分析を絶え
ず組合員に知らせ、呼びかけることによって参加
者を増やしつつある。また、全国に撒かれた運動
の種子が実るのもそう遠いことではないはずだ。
その時にこそ、年代別の集計が真びょう性をもち、
威力を発揮し、例えば20代の悩み、60代の哀
しみを見事に表現することが出来るだろう。また
私たちは、自分で記帳する家計簿によって、政
治や行政を監視し、強力な運動の展開ができるで
あろう。

〈横浜生活協同組合本部消費者委員会常任書記〉